「弱さも我の一部なり」と云える勇気を持ちたい！

ﾒﾙ友の紹介の「べてるの家の『非』援助論－そのままでいいと思えるための 25 章－」を読み終えた（ネットで注文すると翌日には届く凄い世の中！）。

僕は、「障害者福祉論」の教鞭を取ったことがあるが、日本の福祉施策としては、身体障害、知的障害、精神障害に分類されているが、精神障害については皆目知識がなく、実情を理解していないだけに、学生には触れないことを断った程である。それだけにﾒﾙ友の紹介は、専門書より、精神障害の方々を少しは理解する最初の本としては適当かなと思い購読した。

「べてる」は、退院した精神障害のある青年達が作業所を始めたのが最初であり、今は地域と共に生きる有限会社・社会福祉法人等の総称であり、　年商１億円の企業体でもある。この本は初期から長年係わってきたソーシャルワーカーが主にしたためているが、当事者の記載も多く、またユーモアたっぷりの漫画も多く挿入されている。

本の中で、精神障害の方々は「人間関係というあらゆる組織の生命線ともいえる部分に最も深刻な『もろさ』抱えた人達」であり、それ故に「関係において回復し、関係の中で自信を取り戻していくしかなく」、「メンバーが精神障害という病気を通して経験してきたさまざまな『表現する危機』」を乗り越えるべく、「ぺてる」では、『ミーティング』がひと月に 100 回近く開かれている」ということが記載されていた。

人と人の関係故に「人間」と呼称・記載され、その係わり合い方（やりとり－コミュニケーション論－）の問題に関心ある僕としては、注目した記述であった。また、我々は社会のしがらみ（人間関係）の中で時に傷つき苦悩しているが、当ＨＰの副題の「まるがまま、なるがまま」に通じる、「ぺてる」の「病気の御旗を振りながら」、「弱さを絆に」のスローガンには共感できるものがある。自らの「あるがまま－自らの弱さを含め－」の心情を、日々の生活の中で周りに気後れすることなく言葉にすることが、如何に大切かということでもあろう。

（分からないことがあると直ぐにメル友に聞いて助けられている自分は、正に「弱さを絆に」ということでもあるかな。）

（2003 年 09 月 20 日 記）